Bulletin of the Faculty of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1990, Vol. 37, 163−180.

きょうだい間の対人的態度に関する研究*

── 優位性の型による分類を通して ──

斎藤和志　廣岡秀一[1)]　平林　進[2)]
吉田俊和[3)]

I. 問　題

対人的態度，対人魅力に関する研究は，人が他者に対していだいている感情（センチメント）を規定する要因を明らかにしてきた。しかし，これらの研究の多くは，未知の，あるいは架空の人物に対する好意的態度を問題にしていることから，対人関係の初期段階に当てはまるものといえる。そして，近年，現実の対人関係に焦点を当てた研究が増えつつある。そこでは，友人，恋人，配偶者といったいわゆる“親密な関係”における関係の発展過程が検討されている（蘭・中村，1986；中村，1987など）。

対人関係の親密化とともに，他者に対する好意は，恋愛(romantic love)へと発展したり，友愛(companionate love）へと変化したりする（蘭・中村，1986，p.142)。恋愛への発展過程をたどり，配偶者選択，結婚と進展したときに，1組の男女は家族を構成することになる。こうした過程の解明に際しては，対人魅力の研究が重要な知見を提供しているといえる（中村，1987)。そして，ひとたび家族を構成すると，そこには他の集団にはみられない集団としての特徴や人間関係が生じてくるのである（斎藤，1990)。

家族集団のなかで生じる，夫婦関係，親子関係，きょうだい関係の問題に関しては，発達心理学，臨床心理学などが多くの成果をあげている。しかしながら，こうした対人関係に対して社会心理学的な接近を試みたものは少ないといえよう（長田，1987)。家族における“親密な関係”は，一般的な“親密な関係”とは異なり，関係が所与のものとして存在している，関係を断つことには困難を伴う，などの特徴をもちあわせている。本研究で取りあげるきょうだい関係についても，年齢間隔の問題や性別の問題など，一般的な対人関係においても重要と考えられる要因が，きょうだい関係固有のものとして影響を及ぼしていると考えられる。

吉田（1987，1990）は，社会心理学の観点から，わが国におけるきょうだい関係研究を概観している。それによれば，先駆的調査研究として，塩田・大橋（1958)，塩田・大橋・江見（1959）があげられる。彼らは，きょうだい関係が地域社会・年齢・きょうだい数・性・年齢の開き方などによって，どのような一般的特徴をもっているかを検討している。そして，きょうだいに対する好意的感情（親和感）は，異性よりも同性の，年齢が下よりも上の，年齢が接近しているよりも離れているきょうだいに対して高いことが示された。さらに，きょうだい喧嘩は，男子では同性，女子では異性との間で多く，年齢は接近した相手と多いことなどが報告されている。

また，依田（1965）は，核家族の2人きょうだい53組に対してTAT的な図版を用い，きょうだいとしての物語を作らせている。そして，その内容分析から，きょうだい関係を対立・調和・専制・分離の4つに分類している。出現の割合をみると，男子だけのきょうだいでは対立関係が非常に多いが，女子だけのきょうだいでは調和関係が多かった。詳細にみると，異性のきょうだいでは，兄と妹の場合，兄の方に専制関係がみられ，妹の方には調和関係とみる割合が女子のなかでもっとも少なくなっていた。そして，姉と弟の場合には，弟が調和関係とみる割合は男子のなかで最高となる反面，姉の方に分離関係が多くなることなどが見いだされている。

その後，早川・依田（1983）が年代的変化を検討するために，依田（1965）と同様の方法を用いて調査を行い，対立関係と専制関係の減少および調和関係と分離関係の増加が顕著であることを報告している。そして，きょうだい関係の基調がかつてのように対立ではなく調和になり，同時に分離が増加していることは，人間関係の葛

＊　本研究の一部は，日本社会心理学会第29回大会で発表された。
1）愛知淑徳短期大学講師
2）名古屋女子大学教授
3）三重大学助教授

藤を基礎としない表面的な親和であり，希薄なきょうだい関係になっていることを指摘している。

これらの研究では，葛藤場面に現れるきょうだい関係を質的に分類し，きょうだいの性別構成の特質との関連で考察しているところに特徴がある。それに対し吉田・平林・廣岡・斎藤（1989）は，きょうだいが相手に対して抱いている感情，すなわちセンチメントを直接的に測定することによって，きょうだい間のセンチメント関係にかかわっている要因を実証的に検討することを目的として調査研究を行った。具体的には，きょうだい間の葛藤場面における優位性とそれに対する満足度，きょうだい喧嘩のタイプ，終結の仕方，責任帰属の認知などを取りあげている。そして，4つの葛藤場面のうち2つ以上で特定の優位性を選択した者を，その型に分類している。優位性の型と満足度得点，センチメント得点との関連では，無葛藤型や自己優位型で満足度得点は高く，相手優位型で低くなっている。ところが，センチメント得点は平等型でもっとも高く，自己優位型で最低となる。このことは葛藤場面における自己の優位性についての満足度は，必ずしも相手きょうだいに対する好意的なセンチメントには結びつかないことを示唆している。きょうだい構成別では，兄→妹（兄が妹を評定），弟→姉でこの傾向は著しい。

また，井上（1986）は，2人きょうだいにおける衡平（equity）に焦点を当て，日常生活で若干利得過剰群の方が衡平群より，きょうだい関係を調和的に認知することを見いだしている。この2つの研究の間には，平等と衡平，自己優位と若干利得過剰のように，用いた概念と測度に違いがあるので単純な比較はできないが，研究結果の差異は，吉田他（1989）の研究が純粋にきょうだい間の問題を扱っているのに対し，井上（1986）では親からの影響も含めているところに起因するものと考えられる（吉田，1990）。しかしながら，依田（1965）や早川・依田（1983）が日常的なきょうだい関係全般を投影させているのに対して，井上（1986）や吉田他（1989）は限定的ではあるがより具体的な場面を用いているといえよう。そして，どちらもきょうだい関係の分類にとどまらず，対人的な感情に影響を及ぼす要因として衡平や優位性を捉えていると考えられる。

本研究は，きょうだい関係を出生順位やきょうだい構成といった人口統計学的な要因から分類するだけではなく，ひとつの対人的態度として捉え，その成分間の関連性を検討することを目的とする。きょうだい間における対人的態度を感情成分，行動成分，認知成分と純粋に区別するのではなく，吉田他（1989）との関連から，次のような3側面に対応させてその関連性を把握することを試みる。まず，感情的側面として，吉田他（1989）同様に，きょうだいが相手に対して抱いている感情，すなわちセンチメントを直接量的に測定する。

第二に，認知的側面として，きょうだい間の葛藤場面における優位性を取りあげる。依田（1965）や早川・依田（1983）におけるきょうだい関係認知の測定も，結果としては対立・調和・専制・分離といったある種の勢力関係を反映したものといえる。Wolfe（1959）が夫婦間の勢力関係を測定したように，本研究ではきょうだい間で葛藤が生じるような場面を設定し，その帰結をたずねることできょうだい関係の優位性を測定する。これも吉田他（1989）を踏襲するものである。しかしながら，吉田他（1989）では，葛藤場面における帰結が単なる役割行動の遂行ではなく，ある種の勢力関係を反映したものであるという根拠が明確ではない。さらに，4場面のうち2場面以上で特定の帰結を選択した者を分類しているが，その基準の設定にも問題が残る。そこで，本研究ではきょうだい間の全体的な勢力関係の認知をたずねることで，こうした点を改善する試みを行う。

また，行動的側面に関しては，きょうだい喧嘩と日常的な接触という2つの観点から捉える。単純に考えると，喧嘩の頻度が高ければ，他の諸活動での接触は減少し，対人的な感情もネガティブなものとなると推測される。しかしながら，強固なユニット関係として存在するきょうだい関係においては，喧嘩は慣れ合い的な部分も多く，激しい口争いや取っ組み合いを演じても，決定的な対立には至らない。むしろ，特に社会化の過程におけるきょうだい喧嘩は，通常の喧嘩・抗争とは異なり，ポジティブな意味をももつと考えられる（吉田，1987）。吉田他（1989）においても，喧嘩の頻度とセンチメント得点の分析から，喧嘩を“ほとんどしない”きょうだいよりも“週1回程度する”きょうだいの方が良好なセンチメント関係を成立させていることが示されている。吉田他（1989）では，きょうだい喧嘩の頻度の他に喧嘩のタイプや終結の仕方などについても調査しているが，本研究では，行動的側面として，日常的な活動における接触ときょうだい喧嘩の頻度に焦点を当てる。

本研究は，以上の諸測度間の関連性を検討することが目的である。特に，きょうだい関係を優位性の型という観点から捉え，その型における感情傾向としてのセンチメントと行動的側面との関連性を吟味する。

Ⅱ．方　　法

1　調査対象

調査対象者は愛知県，三重県下の4つの小学校の5年生12クラス。きょうだい間の年齢幅を考慮した場合，頻

表1　分析対象者の内訳（各群の表示は前者が評定者，後者が被評定者を示す）

	兄→弟	姉→弟	兄→妹	姉→妹	弟→兄	妹→兄	弟→姉	妹→姉	合計
きょうだい数									
2人	23	21	34	24	22	39	36	26	225
3人	18	16	11	7	24	20	18	15	129
評定対象者との学年差									
1年	9	4	4	4	8	11	6	0	46
2年	17	12	17	14	21	22	25	22	150
3年	10	12	15	10	8	13	18	15	101
4年	5	9	9	3	9	13	5	4	57
合　計	41	37	45	31	46	59	54	41	354

繁に相互作用が行われている可能性が高いこと，および質問紙による調査が無理なく実施できることなどの理由から，対象学年として小学校5年生を選んだ。そのうち，評定対象のきょうだい（年齢がいちばん近い者）との学年差が1年以上4年以下で，きょうだい数が3人以下の者354名を分析対象とした。分析対象者の構成については表1に示した。ただし，欠損データはその都度分析から除外したので，分析によっては若干人数が異なっている。[4]

2　調査の実施

“調査の進め方”という簡単なマニュアルに基づき，各クラスごとに担任教師が授業中に実施した。原則として無記名回答であった。調査用紙はひとりっ子用を含め5種類作成し，調査用紙タイトルに番号で示した（付録調査用紙の□部分）ものを評定対象きょうだい別に配付した。また，各項目の文章中には，評定対象きょうだいを明示した（付録調査用紙の〰部分に“おにいさん”，“いもうと”のように記述）。3人以上のきょうだいの場合には，自分にもっとも年齢の近いきょうだいを評定するよう指示した。ひとりっ子に対しては，同一のフェイスシートに続いて親とのかかわり方についてほぼ同項目数の質問紙を実施したが，本研究では扱わない。調査の実施時期は1987年12月。所要時間は30分程度であった。

3　調査内容

家族構成，きょうだい構成などのフェイスシート項目に加えて次のような内容の調査を実施した（詳しくは付録調査用紙[5]参照のこと）。

① **葛藤場面における優位性**　吉田他（1989）と同様に，きょうだい間の葛藤場面として4場面を設定し，それぞれの場面での帰結を4選択肢から選択させた。葛藤場面は“みたいテレビ番組が異なる時”，“2人でおやつを分ける時”，“ゲームなどのあそび道具を同時に使いたい時”，“行楽や外食の行き先で意見が分かれた時”，の4場面である。それぞれの葛藤場面での帰結は，“自己優位”，“相手優位”，ジャンケンや話し合いによる“平等”および“その他”の4選択肢を設けた。

② **勢力関係の認知**　優位性の妥当性評価のために，きょうだい間における全体的な勢力関係の認知を5段階でたずねた。

③ **センチメント**　きょうだいに対する感情を吉田他（1989）と同一の4項目を用い，4件法で評定を求めた。具体的には，きょうだいに対する“好意度”，一緒にいる時の“楽しさ”，いなくなった時の“さみしさ”，よそのきょうだいと比べた“仲のよさ”である。

④ **対人的葛藤頻度**　いわゆるきょうだい喧嘩の頻度を6項目4段階でたずねた。

⑤ **日常的接触頻度**　きょうだいが日常的な活動をどの程度一緒に行っているかという接触の頻度を10項目4段階でたずねた。

4）優位性の型の決定に際しては著しい回答不備の者3名を除外したので，廣岡・斎藤・平林・吉田（1988）と数値が異なっている。

5）調査では，葛藤場面における帰結と全体的勢力関係認知に対する満足度をそれぞれ4件法でたずねているが，本研究では扱わなかった。

Ⅲ. 結果と考察

1　尺度の構成

(1)　SE得点，IC得点，UC得点

① **センチメント得点**　きょうだい間のセンチメントを測定する4項目の平均および項目間相関を表2に示した。平均値に関しては，項目12が他の項目に比べてやや低いものの，すべての項目が中点の2.5点以上であった。項目間相関は.42から.72とすべて0.1％水準で有意な値を示し，α係数も.83と比較的高い値を示したので，この4項目の合計をセンチメント（以下SEと略す）得点とした。

② **対人的葛藤頻度得点**　いわゆるきょうだい喧嘩の頻度をたずねた6項目の平均および項目間相関を表3に示した。すべての項目が中点の 2.5点以下であるが，“おとうさんやおかあさんに，ほめられたことや買ってもらったものを，自まんしたりみせびらかした時”に関しては1.70（“まったくしない”と“ときどきする”の間）とやや低い。また，項目間相関は.24から.56であった。すべて0.1％水準で有意であり，α係数も.79であったので6項目の合計を対人的葛藤頻度（以下ICと略す）得点とした。

③ **日常的接触頻度得点**　きょうだいで日常の活動をどの程度一緒にやっているかをたずねた10項目の平均と項目間相関は表4に示した。平均値が2点未満（“まったくしない”と“ときどきする”の間）の項目としては

表2　センチメント（SE）測定項目の平均（標準偏差）および項目間相関

項　　目	平均（標準偏差）	項目間相関			
		Q9	Q10	Q11	Q12
Q9　とてもすき　－とてもきらい	2.86（0.74）	－			
Q10　とても楽しい　－とてもつまらない	2.90（0.75）	.72	－		
Q11　とてもさみしい－ぜんぜんさみしくない	2.95（0.93）	.56	.56	－	
Q12　とても仲がよい－とても仲が悪い	2.55（0.77）	.56	.53	.42	－
センチメント得点	11.25（2.61）	.74	.73	.60	.58

センチメント得点の項目間相関の欄は，当該項目と当該項目を除いた他の項目の合計得点との相関係数。

表3　対人的葛藤頻度（IC）測定項目の平均（標準偏差）および項目間相関

項　　目	平均（標準偏差）	項目間相関					
		ア）	イ）	ウ）	エ）	オ）	カ）
ア）いっしょに遊んでいて，ぶつかったり，足をふまれたりしていたかった時	2.34（0.90）	－					
イ）本を読んだり，テレビをみているのに，うるさかったりしてじゃまになった時	2.24（0.82）	.49	－				
ウ）相手の物を，かってに使ったりこわしてしまった時	2.36（0.91）	.28	.33	－			
エ）よくないことをしたのに，「やっていない」，「知らない」とウソをついた時	2.20（0.85）	.30	.37	.56	－		
オ）順番を決めておいたのに，約束を守らなかった時	2.18（0.84）	.24	.35	.46	.52	－	
カ）おとうさんやおかあさんに，ほめられたことや買ってもらったものを，自まんしたりみせびらかしたりした時	1.70（0.84）	.34	.42	.32	.37	.34	－
対人的葛藤頻度得点	13.03（3.59）	.46	.56	.55	.61	.54	.50

対人的葛藤頻度得点の項目間相関の欄は，当該項目と当該項目を除いた他の項目の合計得点との相関係数。

“いっしょに遊びに行く”，“いっしょに勉強する”，“いっしょに買物に行く”などがある。逆に，“いっしょに食事をする”は3点以上（“よくする”から“とてもよくする”の間）であり，“いっしょにテレビをみる”や“ものを借りたり，自分のものを貸したりする”も比較的高い平均値を示している。相互相関は.13から.56であった。やや低い相関もみられたが，それも5％水準で有意であり，10項目全体のα係数も.81であったので，10項目の合計を日常的接触頻度（以下UCと略す）得点とした。

(2) 優位性の型の分類

4つの葛藤場面における帰結の出現頻度を表5の上欄の[　]内に示した。“みたいテレビ番組がちがう時”と“おやつを分ける時”では，その他の帰結がもっとも多く（それぞれ39.0%，30.0%），次いで平等的帰結が多くを占めていた（27.7%と30.0%）。“ゲームなどのあそび道具を使う時”では，自己優位の帰結（30.0%）と平等的帰結（28.0%）が多くみられ，“行きたい場所がちがう時”では，平等的帰結とその他の帰結が多くみられた（それぞれ37.0%，25.1%）。ここでみられた“そ

表4　日常的接触頻度（UC）測定項目の平均（標準偏差）および項目間相関

項　目	平均（標準偏差）	項目間相関									
		ア）	イ）	ウ）	エ）	オ）	カ）	キ）	ク）	ケ）	コ）
ア）いっしょにテレビをみる	2.94 (0.78)	−									
イ）いっしょに勉強する	1.87 (0.80)	.22	−								
ウ）ゲームをいっしょにする	2.39 (0.91)	.35	.29	−							
エ）いっしょに遊びに行く	1.72 (0.69)	.26	.40	.32	−						
オ）いっしょに買物に行く	1.93 (0.77)	.29	.44	.32	.56	−					
カ）いっしょに家のおてつだいをする	2.06 (0.78)	.13	.29	.22	.30	.35	−				
キ）学校のことや友だちのことを話す	2.24 (0.95)	.23	.30	.28	.36	.41	.37	−			
ク）じょうだんを言い合う	2.48 (0.96)	.33	.22	.30	.27	.30	.27	.54	−		
ケ）いっしょに食事をする	3.47 (0.78)	.35	.20	.24	.27	.29	.22	.28	.22	−	
コ）ものを借りたり，自分のものを貸したりする	2.74 (0.91)	.33	.25	.30	.25	.34	.21	.38	.40	.35	−
日常的接触頻度得点	23.82 (5.13)	.45	.46	.46	.53	.59	.42	.58	.52	.43	.51

日常的接触頻度得点の項目間相関の欄は，当該項目と当該項目を除いた他の項目の合計得点との相関係数。

表5　優位性測定項目への反応と勢力関係認知得点との関係

項　目	自己優位	平　等	相手優位	その他
Q1　みたいテレビ番組がちがう時*	[53] 2.91(0.87)	[98] 2.91(0.55)	[63] 3.24(0.68)	[138] 2.96(0.66)
Q3　おやつを分ける時***	[76] 2.71(0.67)	[105] 3.04(0.63)	[64] 3.33(0.73)	[107] 2.93(0.63)
Q5　ゲームなどのあそび道具を使う時	[105] 2.94(0.75)	[99] 3.05(0.50)	[85] 3.01(0.73)	[60] 2.93(0.75)
Q7　行きたい場所がちがう時***	[49] 2.49(0.76)	[131] 2.92(0.52)	[82] 3.44(0.61)	[89] 2.94(0.68)
	自己優位型	平等型	相手優位型	無葛藤型	非一貫型
勢力関係認知得点***	[35] 2.51(0.97)	[95] 2.84(0.53)	[47] 3.51(0.68)	[94] 2.94(0.60)	[79] 3.13(0.56)

上段[　]内は人数。有意水準；　* $p<.05$，*** $p<.001$。

の他”の具体的な内容をみると，“テレビが2台あるのでそうしたことはない”や“おやつははじめから分けてある”といったものであり，ここで取りあげた葛藤場面に対して葛藤が生じないような他の解決策が存在するか，そうした葛藤場面自体が存在しないというものがほとんどであった。

こうした葛藤場面における帰結がきょうだい間の優位性を反映したものであるかどうかを確認するために，それぞれの帰結を選択した者ごとに全体的な勢力関係の認知得点を算出した（相手に勢力があると認知した場合に高得点）。その結果，“テレビ番組の選択”，“おやつの分配”，“外出先の選択”の3項目で有意な差がみられた。“テレビ番組の選択”では，相手優位の帰結を選択した者の方が他の3つの帰結を選択した者よりも相手優位と認知していた（$F(3,348)=3.607$, $p<.05$）。“おやつの分配”では，相手優位の帰結を選択した者が他の3つの帰結を選択した者よりも，平等的帰結を選択した者が自己優位の帰結を選択した者よりも相手優位と認知していた（$F(3,348)=10.541$, $p<.001$）。また，“外出先の選択”では，相手優位の帰結を選択した者が他の3つの帰結を選択した者よりも，平等的帰結を選択した者とその他の帰結を選択した者が自己優位の帰結を選択した者よりも相手優位と認知していた（$F(3,347)=25.440$, $p<.001$）。

有意差の見られた3項目のうち2項目以上で一貫した帰結を選んだ者を自己優位型，平等型，相手優位型，無葛藤型（その他を選んだ者）の4つの型に分類し，一貫していなかった者を非一貫型とした。それぞれの型の出現頻度とその勢力関係認知得点については表5下欄に示した。分散分析の結果は0.1％水準で有意であり（$F(4,345)=15.141$），相手優位型は他の4つの型よりも，非一貫型は自己優位型，平等型よりも，そして無葛藤型は自己優位型よりも相手に勢力ありと認知していた。

(3) きょうだい構成による特徴

SE得点，IC得点，UC得点の平均（標準偏差）と優位性の型の出現頻度をきょうだい構成別に示したものが表6である。3測度に関して分散分析を行ったところ，SE得点とUC得点で有意となった（それぞれ$F(7,338)=7.288$, $p<.001$, $F(7,336)=7.053$, $p<.001$）。SE得点に関しては，妹→姉（姉が妹を評定），姉→弟，姉→妹，兄→弟が兄→妹と弟→姉よりも高い好意的感情を表明していた。また，UC得点においては，兄→弟，姉→妹，姉→弟，妹→姉が兄→妹，弟→姉よりも，また，兄→弟と姉→妹は弟→兄と妹→兄よりも日常的な接触が多いと回答していた。

優位性の型の出現頻度はきょうだい構成の特徴をよく反映しているようである。表6の（　）内は，そのきょうだい構成における割合を示している。自己優位型の出現

表6　きょうだい構成別の諸測度の平均（標準偏差）と優位性の型の出現頻度（％）

	兄→弟	姉→弟	兄→妹	姉→妹	弟→兄	妹→兄	弟→姉	妹→姉
［人　数］	[41]	[37]	[45]	[31]	[46]	[59]	[54]	[41]
ＳＥ得点***	11.85 (2.57)	12.17 (2.13)	9.91 (2.42)	11.93 (2.58)	11.33 (2.59)	11.24 (2.41)	9.87 (2.67)	12.55 (1.87)
ＩＣ得点	13.08 (3.85)	13.65 (2.77)	13.70 (4.15)	13.81 (3.26)	12.95 (3.84)	12.12 (3.12)	12.93 (3.91)	12.59 (3.04)
ＵＣ得点***	26.56 (4.78)	25.71 (3.49)	21.73 (5.02)	25.77 (5.67)	23.07 (4.35)	22.91 (4.77)	21.53 (5.28)	25.25 (4.66)
自己優位型	8 (19.5)	2 (5.4)	8 (17.8)	1 (3.2)	2 (4.3)	4 (6.8)	8 (14.8)	2 (4.9)
平　等　型	12 (29.3)	10 (27.0)	12 (26.7)	14 (45.2)	12 (26.1)	13 (22.0)	11 (20.4)	11 (26.8)
相手優位型	6 (14.6)	3 (8.1)	4 (8.9)	5 (16.1)	5 (10.9)	10 (16.9)	5 (9.3)	9 (22.0)
無葛藤型	8 (19.5)	12 (32.4)	10 (22.2)	8 (25.8)	15 (32.6)	15 (25.4)	17 (31.5)	9 (22.0)
非一貫型	7 (17.1)	10 (27.0)	10 (22.2)	3 (9.7)	11 (23.9)	17 (28.8)	13 (24.1)	9 (22.2)

ＳＥ；センチメント，ＩＣ；対人的葛藤，ＵＣ；日常的接触。有意水準；　*** $p<.001$.

率をみると，姉（→弟で5.4%，→妹で3.2%）と同性きょうだいの弟（4.3%），妹（4.9%）において特に少ない。逆に相手優位型は，妹(→兄で16.9%,→姉で22.0%）と同性きょうだいの兄（14.6%），姉（16.1%）において多くみられた。また，平等型は姉妹関係（姉→妹で45.2%，妹→姉で26.8%）と兄（→弟で29.3%，→妹で26.7%）に多くみられ，無葛藤型は弟（→兄で32.6%，→姉で31.5%）と姉→弟（32.4%）で多くみられた。

このように優位性の型ときょうだい構成を同時に考慮に入れた場合，極端に出現頻度の少ない条件が現れる。そこで，本研究では，兄姉か弟妹かといった年齢の要因，同性きょうだいか異性きょうだいか，および評定者が男子か女子かといった性別の要因に分けて検討を進める。

2　年齢による上下関係を通しての検討

きょうだい間の優位性を考えた場合，年齢の要因は非常に重要なものとなる。まず，ここでは兄または姉が年下のきょうだいを評定した場合（兄姉群；153名）と弟または妹が年上のきょうだいを評定した場合（弟妹群；198名）に分けて分析を進める。この2群における優位性の型の出現率に関しては，有意な差はみられなかった（$\chi^2(4)=5.61$，n.s.）。

(1)　兄姉群における特徴

兄または姉の群における優位性の型の出現頻度とSE得点，IC得点，UC得点の平均（標準偏差），およびそれらの相関関係を示したものが表7である。優位性の型ごとにみた全体的勢力関係認知得点（高いほど相手に勢力があると認知）について触れておくと，自己優位型の得点が他の4つの型の得点よりも低く，相手優位型の得点は平等型と無葛藤型よりも有意に高いというものであった（$F(4,148)=10.756$，$p<.001$）。

IC得点では優位性の型による違いはみられなかったが，SE得点では平等型の得点が自己優位型の得点よりも高かった（$F(4,143)=3.918$，$p<.01$）。また，UC得点においても，平等型が自己優位型よりも有意に高い得点を示していた（$F(4,142)=2.855$，$p<.05$）。年長のきょうだいにおいては，年下のきょうだいとの関係を平等と認知している者の方が，自分が優位な立場にあると認知している者に比べて，相手に対して好意的態度をも

表7　兄姉群における優位性の型と諸測度間の関係

[人　数]	自己優位型 [19]	平　等　型 [48]	相手優位型 [18]	無葛藤型 [38]	非一貫型 [30]
SEの平均(SD)**	9.72 (2.62)	12.13 (2.35)	11.83 (2.27)	10.74 (2.39)	11.76 (2.71)
CIの平均(SD)	12.84 (4.59)	13.57 (3.55)	12.67 (2.33)	14.03 (3.31)	13.86 (3.84)
UCの平均(SD)*	21.82 (4.74)	26.15 (5.17)	26.06 (5.44)	24.43 (4.85)	24.44 (4.60)
SEとICの相関	−.27	−.38**	−.53*	−.33	−.41*
SEとUCの相関	.40	.70***	.80***	.55**	.42*
ICとUCの相関	.12	−.37*	−.31	.10	−.16

SE；センチメント，IC；対人的葛藤，UC；日常的接触。
有意水準；* $p<.05$，** $p<.01$，*** $p<.001$。

表8　弟妹群における優位性の型と諸測度間の関係

[人 数]	自己優位型 [16]	平　等　型 [47]	相手優位型 [29]	無葛藤型 [56]	非一貫型 [50]
SEの平均(SD)	10.25 (2.93)	11.11 (2.48)	11.14 (2.40)	11.07 (2.69)	11.55 (2.57)
CIの平均(SD)	12.56 (3.95)	12.52 (3.35)	12.31 (3.37)	12.72 (3.66)	12.86 (3.51)
UCの平均(SD)	21.27 (4.43)	23.15 (5.04)	24.14 (6.06)	22.70 (4.71)	23.31 (4.53)
SEとICの相関	−.64**	−.25	.02	−.31*	−.32*
SEとUCの相関	.40	.58***	.34	.61***	.60***
ICとUCの相関	.05	−.00	.21	−.01	.11

ち，日常の活動も一緒に行っていると回答していた。

3測度間の関係をみると，いくつかの特徴が見いだせる。SE得点とIC得点の関係は，優位性の型にかかわらず一貫して負の値を示している。すなわち，喧嘩の頻度が多いほど相手に対する好意的感情が低いという関係である。その関係は，自己優位型，平等型，相手優位型と相手が優位であると認知するほど明確になっているといえよう。SE得点とUC得点は正の相関を示し，平等型，相手優位型では特に高い値がみられた。日常の接触の多い者ほど相手に対する好意的センチメントを表明していた。また，IC得点とUC得点の関係は相対的に低いといえる。そのなかで，平等型に5％水準で有意な負の相関がみられた。全般的には喧嘩の頻度と日常的接触頻度との間には関係はないが，対等なきょうだい間においては日常の接触が多いほど喧嘩の頻度は少ないという関係が示された。

(2) 弟妹群における特徴

表8は弟妹群に関して示してある。無葛藤型が28.3%，非一貫型が25.3%とそれぞれ4分の1以上を占め，兄姉群とはやや異なる分布をしているようである（統計的には有意ではない）。各型の全体的勢力関係認知得点を比較したところ，相手優位型の得点が他の4つの型の得点よりも有意に高かった（$F(4,192)=5.843$, $p<.001$）。しかし，SE，IC，UCの各得点には優位性の型による有意な差異はみられなかった。

SE得点とIC得点の相関は，自己優位型，無葛藤型，非一貫型で有意な負の値を示した。特に，自己優位型では－.64という高い負の相関を得た。喧嘩の頻度が多いほど相手に対する好意的感情が低いという関係は，年長群とは逆に，自分が優位であると認知された場合に現れていた。SE得点とUC得点とは全体的に正の相関を示し，自己優位型，相手優位型を除いて0.1％水準で有意であった。兄姉群同様，日常的な接触が多い者ほど相手に対して好意的センチメントを表明していた。しかし，IC得点とUC得点とは無相関であった。

(3) 兄姉群，弟妹群の差異について

優位性の型を考慮にいれない場合の3測度の平均値を比較すると，SE得点には差はみられなかったが，IC得点は兄姉群（13.55）の方が弟妹群（12.63）よりも高く（$t(345)=2.39$, $p<.05$），UC得点においても兄姉群（24.85）の方が弟妹群（23.05）よりも高かった（$t(342)=3.26$, $p<.01$）。また，兄姉群における3測度間の相関は，SE得点とIC得点とでは－.33，得点とUC得点とでは.62と，どちらも0.1％水準で有意な値を示したが，IC得点とUC得点との間には有意な相関はみられなかった（$r=-.14$）。弟妹群の場合も，SE得点とIC得点，UC得点との間には0.1％水準で有意な相関がみられたが（それぞれ－.28と.54），IC得点とUC得点とは無相関であり（$r=.06$），その相関パターンはよく似たものであった。センチメントは喧嘩の頻度と弱い負の相関を示し，日常的な接触頻度と強い正の相関を示していたのである。また，同じ行為成分であっても喧嘩の頻度と接触の頻度には関係がみられなかった。しかし，優位性の型ごとにみるといくつかの特徴がみられた。

年功序列的風土をもつ文化では，年長者が勢力を有することが一般的である。年齢が上の者ほど優位な地位を占めていると考えられる。そうした意味からだけ考えると，兄姉群における相手優位型，弟妹群における自己優位型は，年齢の上下と優位性の上下が不一致な状態と考えられる。両型の出現率をみてもそれぞれ11.7%，8.0%と低い。その両条件においてセンチメントと行為成分，特に喧嘩の頻度との間に明確な関係がみられた。すなわち，喧嘩の頻度が高いほど相手に対する好意的感情が低いのである。逆の見方をすれば，年齢の上下と優位性の上下が一致した兄姉群の自己優位型と，弟妹群の相手優位型においては，センチメントと対人的葛藤の度合いとの関係が希薄ということになる。

また，平等型と無葛藤型の相関パターンはよく似ているが，兄姉群の平等型では喧嘩の頻度と接触頻度との間に負の相関がみられたこともひとつの特徴であろう。喧嘩の頻度が多いほど接触が少なくなるという一見単純な関係は，兄や姉が弟や妹との関係を平等であると評価している場合にしかみられなかったのである。加えて，兄姉群の平等型はSE得点，UC得点自体も他の群（統計的には兄姉群の自己優位型）よりも高い値を示していた。

3 性別構成による検討

(1) 同性群，異性群の検討

きょうだい関係における性別の要因を考慮に入れる場合，評定者の性別だけではなく，きょうだいが同性か異性かという観点も重要と考えられる。表9には同性きょうだい157名について，表10には異性きょうだい194名についての，優位性の型ごとの3測度の平均および相関係数を示した。同性群と異性群における優位性の型の出現頻度には差はみられなかった（$\chi^2(4)=5.85$, n.s.）。また，優位性の型と勢力関係認知得点との関係をみると，同性群では相手優位型が自己優位型と無葛藤型よりも相手優位と認知していた（$F(4,151)=4.303$, $p<.01$）。異性群では相手優位型が他の4つの型よりも，無葛藤型と非一貫型が自己優位型よりも相手に勢力ありと認知していた（$F(4,189)=12.785$, $p<.001$）。

表9　同性群における優位性の型と諸測度間の関係

[人　数]	自己優位型 [13]	平　等　型 [49]	相手優位型 [25]	無葛藤型 [40]	非一貫型 [30]
SEの平均(SD)*	10.42 (2.60)	12.58 (2.39)	12.00 (2.17)	11.11 (2.60)	12.27 (2.10)
CIの平均(SD)	13.15 (3.74)	12.79 (3.34)	12.52 (2.98)	13.74 (3.99)	13.10 (3.64)
UCの平均(SD)	22.62 (4.94)	26.21 (5.42)	25.64 (4.97)	24.15 (4.87)	25.14 (3.91)
SEとICの相関	−.22	−.32*	.28	−.40*	.01
SEとUCの相関	.21	.64***	.66***	.47**	.26
ICとUCの相関	.08	−.36*	.23	.02	.18

SE；センチメント，IC；対人的葛藤，UC；日常的接触。
有意水準；＊ p<.05，** p<.01，*** p<.001。

表10　異性群における優位性の型と諸測度間の関係

[人　数]	自己優位型 [22]	平　等　型 [46]	相手優位型 [22]	無葛藤型 [54]	非一貫型 [50]
SEの平均(SD)	9.73 (2.85)	10.63 (2.13)	10.73 (2.42)	10.83 (2.57)	11.23 (2.84)
CIの平均(SD)	12.45 (4.60)	13.33 (3.63)	12.36 (3.07)	12.91 (3.21)	13.31 (3.68)
UCの平均(SD)	20.80 (4.23)	23.02 (4.69)	24.00 (6.73)	22.81 (4.74)	22.83 (4.75)
SEとICの相関	−.53*	−.21	−.54**	−.28*	−.51***
SEとUCの相関	.50*	.59***	.37	.64***	.63***
ICとUCの相関	.09	.13	−.07	.05	−.05

優位性の型を考慮にいれない場合のSE得点とUC得点には差がみられた。SE得点は同性群（11.90）の方が異性群（10.72）よりも高く（$t(344)=4.26, p<.001$），UC得点も同様の傾向を示した（同性群；25.05，異性群；22.79，$t(342)=4.17$，$p<.001$）。また，測度間の関係は，SE得点とIC得点との間には同性群で−.21，異性群で−.38の負の相関（それぞれ5%，0.1%水準で有意），SE得点とUC得点の間には同性群で.53，異性群で.57の正の相関（どちらも0.1%水準で有意）がみられ，IC得点とUC得点の関係は無相関であった（同性群；$r=-.06$，異性群；$r=.03$）。

優位性の型による比較では，同性群において，平等型のSE得点が自己優位型と無葛藤型のそれよりも高いという結果が得られた（表9；$F(4,147)=3.283, p<.05$）。

相関のパターンを比較すると，同性群の平等型と無葛藤型において，異性群の自己優位型，相手優位型，非一貫型においてSE得点とIC得点の間に有意な負の相関がみられた。すなわち，同性きょうだい間においては関係を平等と認知したり無葛藤と認知する者の方が，喧嘩の頻度の少ない者ほど相手に対して好意的感情をもつ傾向が強く，逆に，異性きょうだい間においては平等と認知する者にそうした傾向はみられなかった。

また，日常的な接触が多い者ほど相手に対して好意的な感情をもつというSE得点とUC得点の有意な正の相関は，同性きようだいの自己優位型，非一貫型と異性きょうだいの相手優位型ではみられなかった。さらに，喧嘩の頻度が高い者ほど日常的な接触が少ないというIC得点とUC得点の有意な負の相関は同性きょうだいの平等型においてのみみられた。

(2)　男子群，女子群の検討

評定者が男子か女子かという観点からまとめたものが表11と表12である。表11には男子184名について，表12には女子167名についての，優位性の型ごとの3測度の平均および相関係数を示した。女子群の自己優位型は9名と少ないが，男子群と女子群における優位性の型の出現率に統計的な差はみられなかった（$\chi^2(4)=8.94$, n.s.）。優位性の型ごとにみた全体的勢力関係認知得点に関しては，男子群で，相手優位型と非一貫型が自己優位型と平等型よりも，無葛藤型が自己優位型よりも高い値を示していた（$F(4,178)=9.710$，$p<.001$）。また，

表11 男子群における優位性の型と諸測度間の関係

[人　数]	自己優位型 [26]	平　等　型 [47]	相手優位型 [20]	無葛藤型 [50]	非一貫型 [41]
SEの平均(SD)**	9.00 (2.37)	11.57 (2.53)	10.50 (2.54)	10.49 (2.70)	11.03 (2.66)
CIの平均(SD)	12.81 (4.66)	12.74 (3.61)	13.30 (3.82)	13.29 (4.05)	13.64 (3.77)
UCの平均(SD)	21.13 (4.81)	24.30 (5.47)	24.20 (6.21)	22.59 (5.11)	23.00 (4.48)
SEとICの相関	−.62**	−.30*	−.02	−.29*	−.32
SEとUCの相関	.43*	.66***	.26	.56***	.45**
ICとUCの相関	.24	.03	.28	.11	−.05

SE；センチメント，IC；対人的葛藤，UC；日常的接触。
有意水準；* p<.05，** p<.01，*** p<.001。

表12 女子群における優位性の型と諸測度間の関係

[人　数]	自己優位型 [9]	平　等　型 [48]	相手優位型 [27]	無葛藤型 [44]	非一貫型 [39]
SEの平均(SD)	12.67 (1.94)	11.69 (2.40)	12.07 (2.00)	11.49 (2.32)	12.26 (2.44)
CIの平均(SD)	12.44 (3.10)	13.36 (3.34)	11.81 (2.04)	13.21 (2.97)	12.82 (3.52)
UCの平均(SD)	22.56 (3.80)	25.00 (5.14)	25.42 (5.59)	24.27 (4.36)	24.50 (4.57)
SEとICの相関	−.10	−.27	−.11	−.40*	−.34*
SEとUCの相関	.13	.67***	.79***	.53***	.61***
ICとUCの相関	−.59	−.37*	−.19	−.05	.13

女子群においては，相手優位型が他の4つの型よりも相手に勢力ありと認知していた（$F(4,162)=6.537$, $p<.001$）。

優位性の型を考慮にいれない場合の得点を2群で比較したところ，SE得点とUC得点に差がみられた。SE得点は男子群（10.66）の方が女子群（11.89）よりも低く（$t(344)=4.48$, $p<.001$），UC得点も同様に男子群の方が低かった（男子群；23.11，女子群；24.61，$t(342)=2.74$, $p<.01$）。また，測度間の関係は，SE得点とIC得点との間には男子群で−.29，女子群で−.30の負の相関，SE得点とUC得点の間には男子群で.53，女子群で.60の正の相関（すべて0.1%水準で有意）がみられ，IC得点とUC得点の関係は無相関であった（男子群；$r=.10$，女子群；$r=-.15$）。

各測度を優位性の型ごとにみたところ，男子群のSE得点で有意な差がみられた（$F(4,175)=4.129$, $p<.01$）。平等型と非一貫型の方が自己優位型よりも相手きょうだいに対して好意的センチメントを表明していた。その他の測度は両群において有意な差を示さなかった。

SE得点とIC得点の相関をみると，自己優位型において男子群と女子群の違いが明確に現れているといえよう。平等型や非一貫型にも一方の群のみが有意な負の相関を示している場合がみられるが，その値は似た傾向を示していると考えられる。しかしながら，女子群の自己優位型では$r=-.10$と無相関であるのに対して，男子群では$r=-.62$という高い負の相関を示している。自己優位型は，SE得点とUC得点の相関でも男女の違いをみせている。女子群では無相関であるが，男子群では有意な正の相関，すなわち相手に対する好意的センチメントが高い者ほど日常の接触も多いという関係である。こうした関係は全般的にみられるものであるが，女子群の自己優位型に加えて男子群の相手優位型においてもこの2測度の関係は無相関であった。そして，女子群の相手優位型においては，逆にその関係がもっともはっきり現れているた。また，先に述べたように，全体的なIC得点とUC得点の関係は有意ではないものの，男子群では正の，女子群では負の値を示すという逆の傾向であった。こうした傾向は自己優位型で顕著なようであるが（男子群；$r=.24$，女子群；$r=-.59$），有意なものではなかった。IC得点とUC得点の関係で有意なものは，

女子群の平等型における負の相関のみであった。

4　全体的考察

(1)　尺度と優位性の型について

本研究で用いた，SE，IC，UC の各尺度は比較的信頼性の高いものといえよう。特に，SE 尺度は項目数が4項目と少ないが，吉田他（1989）同様に高い一貫性を示している。きょうだい構成別にみた SE 得点の傾向も，姉妹関係で良好であり，異性きょうだいに対する値が低くなるという吉田他（1989）の傾向と一致している。異性きょうだいよりも同性きょうだいで親和感が高いという傾向は塩田他（1958）でも報告されている。しかしながら，上のきょうだいか下のきょうだいかという点では差異はみられず，加えて，女子の方が男子よりも相手きょうだいを好意的に評価している傾向がみられた。また，IC と UC に関しても，各分析でみたように，その相関は低く，同じ行動的側面ではあるが，独立したものであることが示唆される。しかし，後に述べるように，特に UC 尺度に関しては，きょうだい関係で重要な項目が網羅されているかという問題が残る。

優位性の型を分類するための項目への反応をみると，予想以上に“その他”の帰結を選択している者が多かった。きょうだい間の葛藤場面を想定した項目が，葛藤場面として存在しなかったり，勢力関係をまったく反映しない場合がみられたのである。内容的にみると，早川・依田（1983）は対立関係と専制関係の減少および調和関係と分離関係の増加を指摘しているが，葛藤場面の設定にやや問題が残るものの，本研究においてもそうした傾向がうかがえるといえよう。また，優位性の型の分類に際して妥当性の検討として用いた全体的勢力関係の認知得点は，ある程度有効であったと考えられる。特に，自己優位型は最も低く，相手優位型は最も高いという一貫した傾向がみられた。しかしながら，平等型，無葛藤型，非一貫型の勢力関係認知得点はきょうだい構成によって微妙に異なっており，きょうだい関係を勢力関係の一次元から理解することの不十分さがうかがわれる。

Wolfe（1959）は，夫婦間の関係を記述する際に“相対的な権威の比”と“共有した権威の程度”の2次元を用いている。そして，妻優位型・夫優位型・一致型・自律型の4つの型をあげている。依田（1965），早川・依田（1983）の分類を対応づけると，専制関係は妻優位型または夫優位型に，調和関係は一致型に，分離関係は自律型に対応すると考えられる。また，相対的な権威の比が等しく，共有している範囲が大きい（一致型的）にもかかわらず，相互に対立している場合が対立関係となる。本研究との関連でみると，自己優位型，相手優位型はそれぞれ妻優位型，夫優位型に対応するであろう。また，平等型の SE 得点が比較的高いことを考え合わせると平等型は一致型（調和関係）に可能性もあるが，無葛藤型，非一貫型が自律型（分離関係）に対応するかという点も含めて今後の検討が必要である。これらは測定方法の問題と密接な関係をもつことになる。たとえば，非一貫型は単なるエラーから生じた型である場合と，安定したきょうだい関係をもたない一群を構成している場合が考えられる。無葛藤型に関しても，実際にきょうだい間の葛藤が少ない無葛藤型が存在するのか，本研究で用いた項目が“その他”の帰結を多く導くような不適切なものであったのかという問題が生じる。

本研究では，きょうだい構成のいくつかの要因に焦点を当て，各測度の関係を検討してきた。ここで，全体的な傾向から優位性の型を再検討してみると（表5），無葛藤型，非一貫型は比較的高い得点を示し，相手に勢力があると認知している傾向が示された。また，SE 得点に関しては，非一貫型と平等型(ともに11.63）が自己優位型（9.97）よりも高い値を示していた（$F(4,338)=3.386$, $p<.01$)。これらの点を考え合わせると，非一貫型は相手に対して勢力を認めているものの平等型同様の好意的感情を示しているのに対して，無葛藤型はあまり好意的ではないということになる。したがって，非一貫型はどちらかといえば自律的傾向を，無葛藤型は分離的傾向を示しているのかもしれない。いずれにしても，各型の内容を明確にするとともに，それらを理解する枠組みが必要となる。

(2)　きょうだい間における上下関係

これまで述べてきたような優位性の型の問題は，きょうだい構成との観点からも検討する必要がある。ここでは特に，自己優位型，平等型，相手優位型に焦点を当て，年齢による上下関係といった観点から各測度の関連性の特徴を検討してみよう。

第一の特徴は，喧嘩の頻度が高いほど相手に対する好意的センチメントが低いという傾向が，特に兄姉群の相手優位型と弟妹群の自己優位型においてみられた点である。一般的な対人関係においては，年齢が上のものほど優位な（勢力のある）地位を占めていると考えられる。実際，全体的勢力関係認知得点について2群を比較してみると，弟妹群（3.11）の方が兄姉群（2.83）よりも相手に勢力ありと認知していた（$t(351)=3.89$, $p<.001$)。こうした意味からだけ考えると，この2条件は年齢の上下と優位性の上下が不一致な状態と考えられる。しかしながら，一般的に，きょうだいにおける年長者は複雑な役割を取らざるを得ない。年齢的に上であるからといって，衡平に役割の負担をまかされることもあれば，喧嘩

両成敗的に平等を強要されることもある。さらには，“おにいちゃんだから”という理由から，逆に我慢をしたり，下のきょうだいをもちあげるような役割を取らされることもある。前述の2条件は，年下のきょうだいにとって，非常に甘やかされた状態とも考えられる。全般的に喧嘩の頻度と好意的センチメントが負の相関を示していることも考え合わせると，逆に，こうした関係の希薄な兄姉群の自己優位型，弟妹群の相手優位型がきょうだい関係としては問題となるのかもしれない。

第二の特徴は，相手優位型でセンチメントと日常的な接触に正の相関が，平等型で日常的な接触と喧嘩の頻度との間に負の相関が，ともに兄姉群でみられた点である。センチメントと日常的な接触との正の関係は平等型で特に強く現れる関係であり，日常的な接触と喧嘩の頻度との負の関係は全般的にはあまりみられない関係である。では，兄姉群における平等，相手優位というのはどのような関係なのであろうか。年長のきょうだいが年少の相手に対して優位性を認めるということは，ある意味で年長者が権威なり権限を抑制をしている状態と考えられる。また，井上（1986）が主張するような若干利得過剰の状態が最も快であると仮定すると，平等と認知している場合も相手優位と認知している場合と類似した状態であると考えられる。しかしながら，先に述べたように兄や姉が自己優位であるような状況がきょうだい関係に希薄さをもたらすとすると，きょうだい間におけるこうした若干の不衡平はそれほど不快ではないのかもしれない。兄姉群の相手優位型のセンチメント得点が比較的高いことも，こうした傾向を示唆するものと考えられる。

衡平という概念は，特に親がきょうだいをどのように扱うかという点と密接な関係をもっている(平林，1987)。井上（1986）の研究もこうした観点から理解することができる（吉田，1990)。しかし，きょうだい関係のなかだけで衡平の問題を考えると，年長者が優位になるためには，日常的な年少者からの依存行動と年長者からの援助行動が意味をもつ可能性がでてくる。福田・依田（1986）はきょうだい関係認知の発達的変化を捉えるにあたって，これまでの対立・調和・専制・分離の4つの関係のなかの調和関係を“たて調和”と“よこ調和”に分けて検討している。“たて調和”とはきょうだいの上下関係が感じられながらも親和的な雰囲気がある関係であり，“よこ調和”とはきょうだいの間に上下関係が感じられず，対等の親和的関係が認められる関係である(福田・依田，1986)。きょうだい関係の認知的側面として優位性や勢力関係を取りあげるとしても，行動的側面のなかに“依存－援助”といったきょうだい関係特有の役割行動の観点を含める必要があるかもしれない。そうすることによって，年齢の上下関係と優位性の型の関連が明確になると考えられる。

また，こうした年齢の上下関係と優位性の問題を考える際に，年齢間隔も重要な要因となるであろう。年齢差が小さい場合には“よこ”関係が強調され，大きい場合には“たて”関係が強調されることも考えられる。しかしながら，早川・依田（1983）が3年未満と3年以上の群で比較し，大きな差異がないことを報告しており，本研究のサンプルの71％は2年から3年の間隔であることを考え合わせると，この点に関してはより体系的なサンプリングを行ったうえで再検討する必要があると考えられる。

(3) 今後の課題

本研究では，きょうだいに対する態度を認知的，感情的，行動的側面から捉える試みを行った。このような対人的態度として捉えることによって，これまでの社会心理学で得られた多くの対人関係研究の枠組みのなかできょうだい関係を理解することが可能になると考えられる。そのためには，いくつかの点を改善していく必要がある。基本的な問題として，先に述べたようなサンプリングに関わる問題点がいくつかあげられる。年齢幅や性別といったきょうだい構成の要因を同時に考慮し2人きょうだいのみを分析対象することや2人きょうだいの両者からデータ収集を行うことなどが必要である。

また，対人的態度研究という観点から考えると，本研究では認知的側面として関係の優位性を取りあげたが，それだけではなく，相手きょうだいのパーソナリティ認知に関わるような側面の検討も必要であろう。対人的態度という場合には，むしろ他者に対する評価的な側面を重視する方が適切と考えられる。そうした場合，相手きょうだいに対する認知は，通常の対人関係に比べてネガティブになるかもしれない。一般的には，相手に対するよい評価と好意的感情は正の相関を示すと考えられるが，きょうだい関係が強いユニット関係として存在する場合，相手がよく分かるということと好意をもつということが独立している可能性がある。

行動的側面に関しては，本研究では対人的な葛藤（喧嘩）と日常の活動の2つを取りあげた。この2つの行動は相関が低く，きょうだい関係においては独立したものと考えられる。これは，きょうだい関係におけるひとつの特徴とみることもできる。しかしながら，これら以外にもきょうだい関係において重要と考えられる行動的側面が指摘された。“依存―援助”といった行動の次元である。きょうだいの役割行動的なものも含めて，より広範囲の行動的側面を検討していく必要があろう。

さらに，広く対人関係研究のなかでの位置づけも考

えていく必要がある。Wishi, Deutsch, & Kaplan (1976) の対人認知の基本的次元のなかで，きょうだい関係は協同か競争かという関係ではなく，やや対等で，緊密な，社会情緒的・非公式な関係として位置づけられている。しかしながら，“やや対等”と認知される関係の中身が複雑であろうことは，今回の研究からも容易に想像できよう。また，Kelley (1979) は，“表面的―緊密”の次元と“協同―競争”の次元を組み合わせ，緊密な場合に協同か競争かということが問題となり，その分布は三角形となることを示している。これは先に述べたWolfe (1959) の夫婦関係の分析にも共通している部分があると考えられる。きょうだい関係においても，勢力関係だけではなく，関係の緊密性や相互依存の程度のような次元を導入することが不可欠となる。このような一般的な対人関係研究の枠組みとの関連性を考えることによって，きょうだい関係だけではなく，“親密な関係”の特徴を明らかにしていくことが望まれよう。

文　　献

蘭　千壽・中村雅彦　1986　対人魅力　対人行動学研究会（編）　対人行動の心理学　誠信書房　Pp.136-160.

福田孝子・依田　明　1986　ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係(2) ―― 幼児期・児童期におけるきょうだい関係認知の発達的変化 ――　横浜国立大学教育紀要, **26**, 143-154.

早川孝子・依田　明　1983　ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係　横浜国立大学教育紀要, **23**, 81-91.

平林　進　1987　出生順位の効果　長田雅喜(編)　家族関係の社会心理学　福村出版　Pp.116-129.

廣岡秀一・斎藤和志・平林　進・吉田俊和　1988　きょうだい間の対人的態度に関する研究　日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 198-199.

井上和子　1986　2人きょうだいにおけるEquityと関係の認知　日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 440-441.

Kelley, H. H. 1979 *Personal relationships : their structures and processes.* New York : John Wiley & Sons.

中村雅彦　1987　夫婦関係の成立　長田雅喜(編)　家族関係の社会心理学　福村出版　Pp.18-30.

長田雅喜(編)　1987　家族関係の社会心理学　福村出版

斎藤和志　1990　家族集団の特徴　大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編)　社会心理学パースペクティブ2：人と人とを結ぶとき　誠信書房　Pp.195-199.

塩田芳久・大橋正夫　1958　同胞関係の心理学的研究(1)　名古屋大学教育学部紀要, **4**, 101-107.

塩田芳久・大橋正夫・江見佳俊　1959　同胞関係の心理学的研究(2) ―― 僻地のきょうだい関係 ――　名古屋大学教育学部紀要, **5**, 200-207.

Wish, M., Deutsch, M., & Kaplan, J. S. 1976 Perceived dimensions of interpersonal relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **33**, 409-420.

Wolfe, D. M. 1959 Power and authority in the family. In D. Cartwrite (Ed.) *Studies in social power.* Institute for Social Research. Pp.99-117.

依田　明　1965　きょうだいの性構成ときょうだい関係　日本教育心理学会第7回総会発表論文集, 262-263.

吉田俊和　1987　きょうだいの存在意義　長田雅喜(編)　家族関係の社会心理学　福村出版　Pp.104-116.

吉田俊和　1990　きょうだい間の相互作用　大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編)　社会心理学パースペクティブ2：人と人とを結ぶとき　誠信書房　Pp.207-214.

吉田俊和・平林進・廣岡秀一・斎藤和志　1989　きょうだい間のセンチメント関係にかかわる要因の検討　三重大学教育実践研究指導センター紀要, **9**, 17-23.

(1990年9月6日　受稿)

付　録

調査BSRⅡ－□

名古屋大学教育心理学研究会

1987年＿＿月＿＿日　　＿＿＿＿＿＿小学校＿＿年＿＿組　（男・女）

この調査は，みなさんの日ごろの家庭での生活について調べるものです。答えには正しい答えとか，まちがった答えとかはありません。また，だれがどんな答えをしたかということも問題にはしていません。おおぜいの生徒で調べたら，どういう答えが多かったとか，少なかったとかを調べるためのものです。もちろん，学校の先生やおうちの人にみせたりするようなことはありません。ですから，気がるに思ったとおりの答えを書いてください。

きょうだいのほかに，いっしょに住んでいる人に○をつけてください。

（　）おとうさん　　（　）おかあさん　　（　）おじいさん　　（　）おばあさん
（　）おじさん　　（　）おばさん　　（　）その他［　　］

自分の生まれた月を書いてください。それと同じように，きょうだいのいる人は，そのきょうだいの学年と生まれた月を書いてください。

きょうだい	学　　年	生まれた月
自　　分	小 学 5 年	

（1）あなたの家では，あなたと＿＿＿＿のみたいテレビ番組がちがう時，どうしていますか。あてはまる（　）のところに○をつけてください。

1（　）あなたのみたい番組をみることが多い　　2（　）ジャンケンや話しあいで半分ずつぐらいみる
3（　）＿＿＿＿のみたい番組をみることが多い　　4（　）その他［　　］

（2）それに対して，あなたはどう思っていますか。あてはまる（　）のところに○をつけてください。

（　）	（　）	（　）	（　）
とても不満である	不満である	満足している	とても満足している

（3）あなたの家では，あなたと＿＿＿＿でおやつを分ける時，どうしていますか.

1（　）あなたがさきに取ることが多い　　2（　）ジャンケンや話しあいで決める
3（　）＿＿＿＿がさきに取ることが多い　　4（　）その他［　　］

（4）それに対して，あなたはどう思っていますか。

( )	( )	( )	( )
とても不満である	不満である	満足している	とても満足している

（5）あなたの家では，ゲームなどのあそび道具を，あなたと＿＿＿で使う時，どうしていますか。

1（ ）あなたの方が，かってに使う時が多い　　2（ ）ジャンケンや話しあいで決める
3（ ）＿＿＿の方が，かってに使う時が多い　　4（ ）その他［　　］

（6）それに対して，あなたはどう思っていますか。

( )	( )	( )	( )
とても不満である	不満である	満足している	とても満足している

（7）あなたの家では，あそびに出かける時や外で食事をする時などで，あなたと＿＿＿で行きたい場所がちがう時，どうしていますか。

1（ ）あなたの意見がとおることが多い　　2（ ）ジャンケンや話しあいで決める
3（ ）＿＿＿の意見がとおることが多い　　4（ ）その他［　　］

（8）それに対して，あなたはどう思っていますか。

( )	( )	( )	( )
とても不満である	不満である	満足している	とても満足している

（9）あなたは，＿＿＿のことをどう思っていますか。

( )	( )	( )	( )
とてもきらい	きらい	すき	とてもすき

(10) あなたは，＿＿＿といっしょにいる時，どんな感じがしますか。

( )	( )	( )	( )
とてもつまらない	つまらない	楽しい	とても楽しい

(11) あなたは，＿＿＿がいなくなったら，どんな感じになると思いますか。

( )	( )	( )	( )
ぜんぜんさみしくない	さみしくない	さみしい	とてもさみしい

(12) あなたと＿＿＿は，よそのきょうだいとくらべて，仲がよいと思いますか。

( )	( )	( )	( )
とても仲が悪い	仲が悪い	仲がよい	とても仲がよい

(13) あなたの家では，あなたと　　で，いろいろなことをしたり決めたりする時，どちらの意見がとおることが多いですか。

同じぐらい

( ) かならず，あなたの意見がとおる

( ) どちらかといえば，あなたの意見がとおる

( ) どちらかといえば　　の意見がとおる

( ) かならず，　　の意見がとおる

(14) それに対して，あなたはどう思っていますか。

( ) とても不満である

( ) 不満である

( ) 満足している

( ) とても満足している

(15) あなたと　　は，つぎのような時，きょうだいげんかをどのくらいしますか。

ア）いっしょに遊んでいて，ぶつかったり，足をふまれたりしていたかった時。

( ) まったくしない　( ) ときどきする　( ) よくする　( ) とてもよくする

イ）本を読んだり，テレビをみているのに，うるさかったりしてじゃまになった時。

( ) まったくしない　( ) ときどきする　( ) よくする　( ) とてもよくする

ウ）相手の物を，かってに使ったりこわしてしまった時。

( ) まったくしない　( ) ときどきする　( ) よくする　( ) とてもよくする

エ）よくないことをしたのに，「やっていない」，「知らない」とウソをついた時。

( ) まったくしない　( ) ときどきする　( ) よくする　( ) とてもよくする

オ）順番を決めておいたのに，約束を守らなかった時。

( ) まったくしない　( ) ときどきする　( ) よくする　( ) とてもよくする

カ）おとうさんやおかあさんに，ほめられたことや買ってもらったものを，自まんしたりみせびらかしたりした時。

( ) まったくしない　( ) ときどきする　( ) よくする　( ) とてもよくする

(16) あなたと＿＿＿は，次のようなことをどのくらいしますか。あてはまるところに○をつけてください。

ア）＿＿＿といっしょにテレビをみる。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

イ）＿＿＿といっしょに勉強する。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

ウ）＿＿＿とゲームをいっしょにする。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

エ）＿＿＿といっしょに遊びに行く。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

オ）＿＿＿といっしょに買物に行く。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

カ）＿＿＿といっしょに家のおてつだいをする。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

キ）＿＿＿と学校のことや友だちのことを話す。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

ク）＿＿＿とじょうだんを言い合う。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

ケ）＿＿＿といっしょに食事をする。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

コ）＿＿＿のものを借りたり，自分のものを貸したりする。

(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
まったくしない	ときどきする	よくする	とてもよくする

これで終わりです。
どうもありがとうございました。

ABSTRACT

Interpersonal Attitude toward Siblings: Relationships among Dominance Type, Sentiment, and Interpersonal Behaviors

Kazushi SAITO, Shuichi HIROOKA, Susumu HIRABAYASHI, and Toshikazu YOSHIDA

The subjects were 354 fifth graders. They had one or two siblings and the differences of their grades ranged from one to four. If they had two siblings, they were asked to rate their siblings whose age were closer to theirs than the other ones. The questionnaire contained three parts; the first was their dominance in four conflict situations, the second was a sentiment toward siblings, and the third was a frequency of interpersonal behaviors that included interpersonal conflicts what are called "quarrels", and usual contacts in daily activities. Scales of the sentiment, the interpersonal conflicts, and the usual contacts had reasonable reliabilities. Siblings were divided into five groups by dominance type; *self-dominant, equal, other-dominant, no-conflict,* and *inconsistency.* In general, the sentiment correlated negatively with the frequency of quarrels and positively with the frequency of usual contacts, and the frequency of quarrels did not correlate with the usual contacts. Dividing into the elder and the younger groups, it was found that in both the other- dominant type of the elder group and the self-dominant type of the younger group, the sentiment negatively correlated with the frequency of quarrels. On the other hand, in both the self- dominant type of the elder group and the other-dominant type of the younger group, the sentiment did not indicate a significant correlation with the frequency of quarrels. Futhermore, in the equal type of the elder group, the frequency of quarrels negatively correlated with the frequency of the usual contacts. These findings were discussed in terms of the dominance types of siblings.